

がん

医療機関が相談の場提供

「今日は具合が悪いからパス」と言うと、子供たちが家事をしてくれるの」

「うちは男の子が2人。私がいなくなったらどうやって生きていくのかな」

北海道大学病院(札幌市北区)で毎週月曜日午後開催される「わかばカフェ」は、子育て中

のがん患者を対象にしたサロンだ。がんの種類は問わず、他医療機関に通う患者も参加でき

る。子供にがんのことを伝えたとときの経験を話したり、治療で脱毛した場合のかつらの選び方を相談することもある。

がん患者や治療経験者の就労支援は最近、やっと注目されるようになったが、医療機関で患者の家族も視野に入れた支援をするケースは多くない。発案者は、同病院腫瘍センターのチャイルド・ライフ・スペシャリスト(CLS)、藤井あけみ助教。

親が重い病気になった場合の子供の支援などに携わる中で、子育て世代の患者の多くが、自分の病気がんと分かったとき、自身の将来とともに「子供はど

うなるのか」という不安を抱えることを知った。藤井さんは「がんに関する話題はママ友同士でも話にくい。子育てという共通のライフスタイルを持つ患者同士だから打ち明けられることがあるはず」と、昨年5月から隔週でカフェを開催(今年5月から毎週)。今年4月末までに30〜50代の194人が参加した。「同世代の価値観が近い人に会え、笑ったり泣いたりしてガス抜きができる」と口コミで広がり、最近では毎回10人程度が参加している。

「癒やされた」

北海道江別市に住む女性(47)は約5年前に肺がんが見つかり、当時「余命1年」と診断された。小学校と中学校に通う子供がいたが、生きがいであった子供の部活の応援に行くのを主治医に止められたり、同級生の保護者の間で病状に関して不本意なうわさが広まるなど、治療以外の悩みが絶えなかった。昨年夏にカフェに初参加し「抱えていたことを聞いてもらって癒やされた」という。

手稲溪仁会病院(札幌市手稲区)の子育て世代がん患者サロン「さくらんぼ会」は子供と一緒に参加することができ、親同

「わかばカフェ」では毎週、子育て世代のがん患者らが治療や子育ての悩みなどをお茶を飲みながら語り合う—札幌市北区の北海道大病院で



士が話している間は、同病棟のCLSが子供と遊んだり話をしてくれる。3人の子供を持つ大腸がんの女性(37)は「子供なりにがんのことを知っていて心配するので、『大丈夫だよ』と話している」という。サロンで看護師や先輩患者に治療の経過などを相談することが自身の安心にもつながっているといい、「この会はもう一つの薬のような存在」だという。

米では子供も支援

米国では、患者支援団体や一部の病院によって、がん患者の子供への支援が広がっている。米テキサス大MDアンダーソンがんセンターでは、「子供にも親のがんに関する情報を適切に伝える」ということを重視。①がんという病気であること②伝染しないこと③がんになったのは誰のせいでもないこと——を説明するよう提案している。

親(患者)向け資料をホームページで紹介したり、がんの親を持つ子供のためのプログラムを実施したりしている専門家グループ「ホープツリー」(http://www.hope-tree.jp)の大沢かおり代表によると、医療現場では目の前の患者の治療が第一で、医療者側にも子供の支援に関する知識を持つスタッフはほとんどいない。大沢さんは「子供の気持ちや生活が安定すれば患者さんも安定し、治療に前向きにもなれる」とメリットを話す。

大沢さんは、診察の際などに医療者が「お子さんはがんのことを知っていますか」と質問するなど、病院で子供のことを話してもいいという雰囲気作りから始め、ホームページのホームページで公開している親向けの参考資料を提供することなどを提案する。「親(患者)からの相談に応じることで間接的に子供の支援をすることになり、患者さんの不安の軽減につながるかもしれない」と話す。

【大場あい、写真も】